

# 尖閣研究

高良学術調査団資料集

(上)

尖閣諸島文献資料編纂会

表紙題字：瑞慶覽長方氏揮毫



Tetsuo Tabara

支那列島 魚釣島 12 1950. 3. 28

口絵写真

テッポウユリを手にしている高良鉄夫博士、1950年3月28日。  
魚釣島の旧古賀氏事業所石囲い楼門前にて。

---

## 発刊の辞（上）

---

この資料集は、幾つかのきっかけから生まれた。

昨今の尖閣領土問題は、一段と厳しさを増して、かまびすしい。

魚釣島と黄尾島にある明治期の古賀開拓村の写真を見ると、ヘンボンと日の丸がひるがえっている。大手週刊誌記者がその事実を知り、日本領土の紛れない証拠になるとばかりに件の写真を探していた。

問い合わせの電話を受けたときに、些か勉強不足ではないかと苦言を呈した。

常に尖閣問題で引き合いに出されるのが島の開拓者古賀辰四郎と古賀村の件である。これは無論、重要な事実である。

他方、地元沖縄側は、終戦直後からいち早く、尖閣の学術調査に乗りだしていた。琉球大学を主体に綿々と調査研究を行い、大きな実積を積み上げていた。

今日の尖閣研究はこれら総合的組織的学術調査の成果に負うところが大きい。ところが、この事実は殆ど知られていない、全国的認識不足だった。

この調査は「尖閣調査のパイオニア」高良鉄夫博士によって切り開かれた。

1950年4月、今を去る57年前のことである。

終戦直後の吞まず食わずの厳しい時代に、単独で調査（第一次予備調査）を敢行した。高良博士の先見性と行動力には驚かされる。

翌々年の52年4月、第二次調査には資源の専門家を引き連れて行った。

53年8月、第三次は学生11名を参加させた調査だった。

この3回にわたる調査をなし遂げるには並々ならぬ苦労があった。

とりわけ、第三次調査は沖縄経済人の協力で実現できたものともいえた。

63年4月、琉球政府文化財保護委員会から委託をうけて、アホウドリ調査を行った。これが第四次調査である。

68年には沖縄懇高岡大輔氏を案内して第五次調査（鉱物資源予備調査、海鳥調査等）を行った。これらは50、60年代に実施された琉大調査の前半部にあたる。

高良博士が主導した5回にわたる調査を「高良尖閣学術調査団」と称してもよい。

高良調査団に参加したメンバーは延べ40名余に上っている。

高良博士は93歳（2005年当時）の高齢であるが、今なお矍鑠としておられる。

沖縄生物学会や農業学会、沖り協会長など要責を担い第一線で活躍されている。

その高良博士、調査団メンバーに、直にインタビューして、4、50年前の島のように、調査の経緯や内容に耳を傾けるべきである。

これら事実を正しく把握し、全国に紹介すべきでは、しかも自国の島だったから調査した。（他国領土なら調査しないし、できない）これこそ確固たる実効支配ではな

いかと言った。

驚いた記者は上司に相談したいとの返答だった。

彼らマスコミ人には、この地道な事実にスクープ的価値は存在しなかった。

なしのつづてで終わったのは遺憾だった。

70年代から80年代にかけて尖閣調査が目白押しに実施された。

学術調査、資源調査、漁業調査、等々である。

これらの出発点となったのが、高良学術調査団である。

明治30～40年代の黒岩恒氏や宮島幹之助氏、恒藤規隆博士、昭和10年代の正木  
任氏による優れた調査があったが、いずれも単発的、個別的調査の域を出なかった。

戦後は、様相は一変した。

各分野の専門家を網羅した組織的かつ総合的学術調査がスタートした。

それに尽力した高良調査団の功績は特筆すべきである。

高良博士の果たした役割は大きく、尖閣学術調査の発展に大きく貢献している。

それに比して、その調査経緯や内容は余り知られていない。

加えて、参加者の殆どが高齢となっている。

参加者や関係者（所轄機関や部署の担当者）で亡くなった人も少なくない。

当時の調査資料、報告書も入手しがたい。

72年復帰に伴う組織変更で所在不明になった資料も少なくない。

琉球農林省資源局、琉球政府、琉球警察局、琉球文化財保護委員会などの行政文書  
がそれである。年を経るにつれて、ますます散逸が危ぶまれる。

このようなことから資料集のとりまとめが急がれた。

今回、見きり発車であったが、どうにか刊行することができた。

これも高良博士が監修の労を引き受けて下さったからである。

高良博士はもとより、新納義馬氏ら参加メンバーの絶大な協力に負うところが  
大きい。また、書棚や押入の隅、筐底をあさり、古いアルバムを剥がすなどして、当時  
の資料を探しだし、快く提供してもらったのも少なくない。

このお陰で以て、論文や報告書、写真、新聞記事など、貴重な資料が収録できた。  
この場を借りて、厚く感謝申し上げます。

なお、所在不明の資料については、これからも発見に努め、追補していきたい。

できるだけ、完璧な資料集を期していきたい。

今後、尖閣領土問題は一段と厳しさを増してくるものと思われる。

尖閣列島に関わる様々な事実については、正しい認識がますます必要となる。

この資料集が、その一助になれば幸いである。

2007年（平成19年）10月1日

尖閣諸島文献資料編纂会

---

## 目 次

---

監修の挨拶.....	高 良 鉄 夫.....	1
1 . 調査のあらまし.....		3
2 . 調査関連新聞記事等.....		11
3 . 調査報告書 ~各次毎個別篇~		
第一次調査(1950.4)報告書		
1 . 無人島探訪記.....	高 良 鉄 夫.....	51
2 . 尖閣列島訪問記.....	高 良 鉄 夫.....	61
第二次調査(1952.5)報告書		
3 . 尖閣列島あれこれ.....	高 良 鉄 夫.....	67
4 . 尖閣列島採集記.....	多和田 真 淳.....	75
5 . 尖閣列島調査報告.....	松 元 昭 男.....	103
第三次調査(1953.8)報告書		
6 . 尖閣列島の動物相について.....	高 良 鉄 夫.....	113
7 . 尖閣列島の植物相について.....	多和田 真 淳.....	131
8 . 尖閣列島生物調査に参加して.....	森 田 忠 義.....	149
第四次調査(1963.5)報告書		
9 . 尖閣のアホウドリを探る.....	高 良 鉄 夫.....	161
10 . 尖閣列島の植生.....	新 納 義 馬.....	171
11 . 尖閣列島海洋調査報告.....	伊志嶺 安 進.....	197
第五次調査(1968.7)報告書		
12 . 尖閣列島周辺海域の学術調査に参加して...高岡大輔.....	高 岡 大 輔.....	211
13 . 尖閣列島の海鳥について.....	高 良 鉄 夫.....	221
14 . 尖閣列島の水質.....	兼 島 清.....	235
15 . 海洋学的に見た尖閣列島.....	伊志嶺安進・正木 譲	241
4 . 座談会(上).....		251
第二次、三次調査に参加して		

5 . 懐かしの思い出アルバム.....	277
尖閣実習調査、53、4年ぶりの再会、懐かしの学舎	

6 . 思い出追想記（上）～第二次、三次調査～

調査追想4題.....	高良鉄夫.....	295
尖閣の土性海鳥糞調査に参加して.....	棚原清一.....	305
尖閣列島調査同行実習記.....	上運天賢盛.....	311
尖閣列島学生実習回顧録.....	新納義馬.....	317
尖閣列島実習調査に参加して.....	瑞慶覧長方.....	323
尖閣の思い出雑感.....	泉川寛.....	329

尖閣筐眼鏡（上）～第二次、三次調査～..... 335

1 . 無人島アドベンチャーがビッグな体験に...	新島義龍
2 . タクソディオクシロン・カニングハム・オイデス・ワタリを求めて	田中一郎
3 . 島中が海鳥とヤブ蚊でいっぱい.....	比嘉盛幸
4 . 絶海に神気漂う尖閣古葉島.....	岡田潤治
5 . 甦る記憶の断片.....	大屋一弘
6 . 息も絶え絶えボートに飛び乗る.....	東清二
7 . シュウダの首根っこを押さえた.....	有川廣良

特別寄稿

父と鰹業、魚釣島仮工場、等々.....	発田敏彦.....	349
海鳥を両手一杯持ち帰り、船で食した.....	東江重夫.....	353
父の遺骨収集は、自分の船と手で.....	伊良皆高吉.....	359

7 . 尖閣調査のパイオニア.....	367
～高良鉄夫博士の業績とプロフィール～	

8 . 高良尖閣学術調査団参加者一覧.....	377
-------------------------	-----

あとがき



調査余滴、調査異聞、閑話休題

尖閣列島写真戦後第一号、波間に浮かぶ南小島.....	46
尖閣渡島の漁船チャーター、篠原教授の次兄へ頼み込み.....	101
第二次調査が生んだ「八重山歴史 喜舎場永 著」出版の秘話.....	102
沖縄の二大巨人岩崎翁の薫陶と黒岩校長の遺風を受ける.....	110
尖閣付近で海賊に襲われ6名犠牲、多和田氏の警告現実に.....	147
魚釣島にアホウドリ数万が集来、黒岩氏が報告.....	170
終戦直後の石垣島地震、伊志嶺氏、震源地黄尾島近海と推定.....	208
尖閣初期調査は、経済人の支援で成し遂げられた.....	276
出発の3日後、琉球政府発足、調査は学問、行政の黎明期に.....	292
尖閣の二大啓蒙書「自然との対話」と「鳥が魚を食べた話」.....	366

註：「尖閣列島」の名称の使用について

明治43年黒岩恒氏が「此列島には、未た一括せる名称なく、地理学上不便少からざるを以て...尖閣列島なる名称」を提唱以来広く使われていたが、1972年復帰以降から今日では、「尖閣諸島」の名称が一般的となっている。本書は高良学術調査団は1950年～60年代の調査であるため、「尖閣列島」の名称を使用している。



## 監修の挨拶

高良鉄夫

雄大な海流渦潮躍る黒潮の中に点在する常緑の島じま、並びに尖閣列島を含む沖縄県は、亜熱帯海洋性風土に恵まれ、古動物（生きた化石）の特異性、固有種の奇妙な分布、渡り鳥の越冬地又は中継地、東洋一を誇る海洋鳥の群集、勝れた植物相の景観等から俗に東洋のガラパゴスと呼ばれていた。

それは昭和五年ころのことである。当時、古賀氏の事業は中止されていたと聞く。

だが、去る大戦によって沖縄全体が焼土化し食糧難に追い込まれるなど、地域住民は生活物資を求めて、新開地を物色していた。未開の宝庫と言われていた西表島の開発、秘境尖閣列島への出漁が活発になつていったのもこの頃である。

私は1950年、尖閣の調査に着手したのもこのような動因があった。

爾来、有志を募り68年までに五回の調査を行った。

今日、尖閣列島の学術調査、資源調査等は学者、団体、有志等によって行われ、それぞれ多くの成果を上げている。

ところが、個々の成果を系統的にまとめた集録はかつて見たことがない。

無論、私共の調査についても然りである。

その必要を痛感しながらも、老骨の障害者の身ではまとめることができず、ただ思案に暮れていた。

尖閣列島の詳しいことは、沖縄はもとより日本本土の人士にも、それほどによく知られていない。

折しも、私共の調査について、尖閣列島文献資料編纂会がまとめて上梓すると朗報に接し、小踊りして喜ぶとともに、積極的に最大の協力をする旨を誓った。

調査結果の資料は、多面にわたるので、編纂会の苦労は並大抵でないことは、あらかじめ承知していた。調査当時、若かった人士も、今は老いて、すでに故人になった人士もいる。

それ故に、本書は尖閣列島のすべてではない。

また、最大の協力を誓ったものの、老い行く身の体調はままならず、十分に監修できなかったのは否めない事実である。

編纂会の不撓不屈の情熱に敬意を表するとともに深く感謝を申し上げる。

監修を終えて、ほっとしていると、その日の夢に、青空高く夏雲に乗って、尖閣列島の島々を見下ろしている。すべての無人島は、今に生きており、筆者の感動と喜びはひとしお高い雲の上にあるような気がした。

列島の日本帰属を国際的に明確にし、東洋のガラパゴスの一環を確立したいものだ。戦国時勢の腰抜けサムライでは、東洋のガラパゴスは、いつのまにか姿を消してしまうことが気にかかる。

尖閣列島の全盛時代の姿を復活したいことは調査員各位の熱望である。

調査隊に1人の医師も加わっていないことは、計画者のミスである。

だが5回にわたる調査とも無事故で全員帰還できたことは、何よりだ。

神仏の加護の感謝に、いくら感謝してもつきることがない。

誠意を尽くせば神仏の加護は必ず訪れることをかみしめる。

関係者の半世紀前の記憶をまとめることは容易ならぬ業である。

編纂会の熱意は無論、調査員各位が半世紀前の記憶を深く掘り出して、素晴らしく、まとめたことに、感謝の念をひとしお強くするとともに、ご寄稿下さった長谷川博氏、伊良皆高吉氏、東江重夫氏、発田敏彦氏、比嘉健次氏に対して深く謝意を表する次第である。

完全無欠とは言えないが、本書が広く一般に活用されることを念願し、その成果に期待したい。今なお波立つ国際間の正常化の参考になれば幸いである。

追補

無人島は生きており、尖閣列島の海洋鳥は次のことを示唆している。

地球上における動物の中で、人類ほど身勝手に悪知恵のある恐ろしいものはいない、とうそぶくあたり、国際保護を強調しているようだ。

同列島近海における天然ガス、石油の開発は慎重でなければならないことを強調したい。

2007年(平成19年)8月15日 高良鉄夫

## 1 . 調査のあらまし

## ( 1 ) 第一次調査

調査期間:1950年3月27日～4月10日

調査参加者:元八重山農林高校長、琉球農林省農業改良局調査課長 高良鉄夫

### 特長と意義

「尖閣調査のパイオニア」高良鉄夫博士の少年時代からの夢は無数の海鳥が生息している古賀の無人島探検だった。発田氏の鰹節仮加工場が魚釣島にあり、そこへ通う漁船に便乗して渡島した。

動機は海鳥調査と海幸・山幸の富源調査、加えて「海鳥のヒナの訓練」の妙技を観察し、敗戦後の荒廃した青少年教育に資するためでもあった。

上陸してみると、野生の猫が繁殖し、かつてのアホウドリの楽園は、海鳥が一羽も棲息していないのに衝撃をうけた。対岸の南北小島の天空は無数の海鳥の乱舞で陽がかき曇るほどだった。憧れの海鳥の島には渡島できず、魚釣島に約2週間滞在し、生物相の調査に専念する。

周辺海域は多数の漁船が入り乱れて操業、沖縄はもとより二本マストの大型船は四国からのカツオ漁船、九州のサバ漁船やカジキ漁の突船、台湾からの漁船で賑わっていた。

尖閣列島のようなすを、「卵と鳥で島は一ぱい」=「海鳥の楽園」、「海岸で鰹の釣れる島」=「漁業資源の宝庫」、また「鳥くそ(肥料)を利用することも考えねばならない」と発表、これが戦後初の報告となる。

氏は尖閣の生物相調査に加えて、富源調査を痛感する。

各専門家を網羅した合同調査を行う決心をし、琉球農林省資源局へ働きかける。

この第一次調査を予備調査と位置づける。

### 主な調査報告書

1 「無人島探訪記」高良鉄夫 南琉タイムス 1950.4.25～5.22

2 「尖角列島訪問記」高良鉄夫 うるま新報 1950.9.15～16

## ( 2 ) 第二次調査

調査期間:1952年4月10日～20日

調査参加者:琉球大学 高良鉄夫助教授、琉球林業試験場 多和田真淳技官、

資源局農改課 棚原清一技官、琉球水産研究所 知念正男技官

琉大学生3名:上運天賢盛、松元昭男、新垣秀雄

## 特長と意義

琉球大学は51年2月、琉球政府は52年4月に創立された。

創立したばかりの琉球大学と琉球農林省資源局との合同調査となった。

3人の専門家を加えて、海鳥や有用植物など生物相、地形や地質・土性、海鳥糞（グアノ）、漁業、水産資源に亘る合同調査だった。

高良助教授は、この調査団に琉大生3名を参加させ、現地教育、実習的要素を加える。

氏は高農時代に南洋群島に単独渡島し、危険を冒して密林奥地へ分け入り探訪踏査した。これが大いに有益だったとして、尖閣調査は、絶海の無人島だけに、危険を伴い命懸けの冒険だったが、あえて学生を参加させ、現地実習、フィールド調査の素晴らしさを体験させた。琉大は開学間もない頃だったので、研究費とてなく、調査費用の捻出に一苦労、学生たちも自己負担だった。

一行は南小島と魚釣島に上陸、精力的に生物相と富源調査を行った。

新聞は、「新種や珍種発見 “ 冬期漁場に最適 ” 」と秘境調査の成果を讃えた。

氏は「尖閣列島あれこれ」、多和田技官は「尖閣列島採集記」、学生の松元氏は「尖閣列島調査報告」を連載、尖閣に対する一般認識を高めるのに大きく貢献した。

なお、高良助教授と、多和田技官は翌年の三次調査の成果を踏まえて、琉球大学農学部学術報告第一号に論文を発表した。

この資料集では、両者（**6**、**7**）は第三次調査報告に加えた。

この中で、動植物の新種、亜種の発見を報告、尖閣の生物地理学的重要性に言及し、自然保護を訴えている。また多和田技官は、国際漁場化している海域の無法さに驚き、海賊船出没の危険を警告した。奇しくも、それが1955年「第三清徳丸事件」として現実化した。

この第二次調査が、戦後の尖閣学術、資源調査の幕開けとなった。

また上運天氏は、1980年代にこの体験をもとにした教育副読本「魚が鳥を食べた話」を著した。

## 主な調査報告書

- 1** 「尖閣列島あれこれ」高良鉄夫 沖縄タイムス 1952.5.8 ~ 29
- 2** 「尖閣列島採集記」多和田真淳 琉球新報 1952.6.29 ~ 7.15
- 3** 「尖閣列島調査報告」松元昭男 琉球新報 1952.6.2 ~ 4

## (3) 第三次調査

調査期間:1953年8月1日~4日

調査参加者:琉球大学高良鉄夫助教授、宮城元助助教授

琉大学生 11 名：新納義馬、瑞慶覧長方、新島義龍、田中一郎、森田忠義、泉川寛、岡田潤治、比嘉清幸、東清二、大屋一弘、有川（前山）廣良

### 特長と意義

琉球大学教官 2 名、学生 11 名で、夏休みを利用して探訪調査する。

石垣島、西表島の自然観察と移民村訪問も行っている。

大学からの援助は期待できず、全て自らの力で成し遂げねばならなかった。

難題は、尖閣へ渡島する漁船探しだった。

今回は、漁閉期と重なり石垣港で 5 日間も待ちぼうけを食わされた。

高良助教授は一工夫した。沖縄開洋高校（のち沖縄水産高校）に話しをもちかけた。

実習船開洋丸に便乗して渡島する、その代わりに、琉大側が必要な物資の便宜を図るとして、燃料重油は琉石（稲嶺一郎社長）、米は沖縄食糧（竹内和三郎社長）、缶詰その他食糧品はリウボウ（宮里辰彦社長）から提供してもらった。

新納氏ら学生は寄付金集めに奔走した。国際劇場（高良一社長）、沖映（宮城嗣吉社長）氏らへお願いにいくと、目の前で売上金の分厚い札束を取り出して、「でえ、いくらほしい？」と、寄附の申し出に快く応じてくれたという。

当時の経済界や経済人の絶大な支援を受けて尖閣調査は実現できた。

憧れの北小島、南小島、魚釣島の 3 島へ上陸した。

誰もが、絶海の孤島の大自然に瞠目し、南北小島には、数 100 万羽の海鳥が棲息、天空を無数の群鳥の乱舞している壮観さに感激した。

森田氏が北小島で白い大きな鳥を目撃し、後日赴任校にあったアホウドリ剥製標本と同じ鳥だったのに驚いたと報告している。

アホウドリ目撃が事実ならば重大な発見である。

尖閣渡島は、危険を伴う命懸けの現地実習、フィールド調査だった

魚釣島では帰路、台風接近で大シケに遭い、島の裏側の断崖からロープを吊って、迎えにきたボートに飛び降りたとのこと。

那覇では全員遭難したとの噂も立ったという。

氏の冒険的気質に加えて、壘カラの気風が残る当時だからできたであろう。

学生らは尖閣調査・現地実習を終生の痛快事、青春の誇りとした。

第二次 3 名、第三次 11 名、計 14 名が参加したが、後年、学界、教育界、産業界のリーダーとして活躍している。尖閣での貴重な体験と島のようなすを広く知らしめるのに貢献した。なお、この頃まで台湾漁船の操業は少なく、不法上陸して海鳥を乱獲してなかったことが分かる。

### 主な調査報告書

#### 6 「尖閣列島の動物相について」高良鉄夫

琉球大学農学部学術報告 第 1 号 1954.4



7 「尖閣列島の植物相について」多和田真淳

琉球大学農学部学術報告 第1号 1954.4

8 「第三次尖閣列島生物調査の参加して」森田忠義 私家稿

(4) 第四次調査

調査期間:1963年5月15日～18日

調査参加者:琉球大学高良鉄夫教授、新納義馬助教授

琉球気象庁海洋係長 伊志嶺安進、琉球新報社 田積友吉郎記者、同社 森口豁  
記者、沖縄タイムス社 粟国安夫記者、琉球放送テレビ社 赤嶺得信記者、沖縄  
科学教材社 照屋林松

特長と意義

琉球政府文化財保護委員会から委嘱されたアホウドリ調査である。

今回、海鳥や植物相調査に加えて、琉球気象庁海洋係長伊志嶺氏を参加させた。

生物地理学的観点から尖閣の海洋学的アプローチを重視したのである。

国際的保護鳥アホウドリ発見を大々的に報じるとしてマスコミ人も同行したが、  
初っ鼻に二つのハプニングに遭う。

赤尾島海域が米軍演習区域だったこともあって警告照明弾(?)を浴びる。

そのあと、潮目(三角波?)に遭い転覆寸前となったが、全員が命拾いをする。  
沈没はまぬがれたものの海水が機関室まで浸り、エンジンが故障、船足が遅くなった。

このため、調査日程も大幅に狂って短縮を余儀なくする。

同行の記者たちは、調査の進捗状況を、逐一現地発信するつもりでいた。

ところが無線機も使用不能となり、石垣寄港後にまとめて送信するありさま。

後日、アホウドリ調査ルポ記事や紙面特集号が組まれ、調査のあらましが紹介さ  
れた。またTV局、科学教材会社の2者により、各々16ミリで島や海鳥のようす  
が撮影され、前者がTVニュースとして放映されたのは特筆されよう。

この16ミリ記録フィルムは散逸し所在不明とのこと。

残っていれば、学術的にも貴重な記録だったが。

新納助教授の魚釣島の北東岸から山頂にかけた植生調査によってこれまで未踏だ  
った地域が補われ、植物群落の全体構造が明らかにされた。

米軍演習区域にある赤尾嶼と黄尾島は洋上からアホウドリの有無を観測した。

期待した南北小島では、発見することができなかった。

その代わり目にしたのは、台湾漁船の領海侵犯だった。

竹で簡単な筏を組み、これで荒波を乗り切って不法上陸を繰り返していた。

南北小島と黄尾島の海鳥と卵を乱獲の限りを尽している。西表沖にある中之御神

島の海鳥の乱獲も甚だしいが、尖閣においては10年前の面影もない。

「海鳥の樂園」は破滅寸前、これではアホウドリは見つかるはずがない。

たとえ、生息していたとしても、彼らに捕獲され食べられたとも思えた？

(公式発表では絶滅としたが、氏は南小島の頂部を大きな白い鳥＝アホウドリか？が旋回している姿を望見した。前回調査の森田氏の目撃と並んで興味深い事実である)。高良博士は乱獲で絶滅の危機に瀕した憂える実情を報告し、海鳥保護策を強く訴えた。文化財保護区域に指定し、上陸禁止措置を講じるべしと提言した。

#### 主な調査報告書

9 「尖閣のアホウドリを探る」高良鉄夫「南と北」第26号 1964.3

10 「尖閣列島の植生」新納義馬 琉球大学文理学部紀要

理学篇第7号 1964.5

11 「尖閣列島海洋調査報告」伊志嶺安進 琉気時報 第7号 1963.5

#### (5) 第五次調査

調査期間:1968年7月7日～9日

調査参加者: 沖経懇専門委員 高岡大輔、琉球大学 高良鉄夫教授、兼島清教授、茨城大学 北岡甲子郎助教授、琉大経済研究所研究員 真栄城守定、琉球政府総務局渉外課長 新城鐵太郎、同通産局工業課 大城盛俊、琉球気象庁海洋係長 伊志嶺安進、八重山气象台観測係長 正木讓、八重山地方庁水産係長 田代浩 石垣市水産係長 田盛恒武、八重山警察署巡查 平良繁治、同巡查 伊良波幸勇、琉球新報社 松田賀勝記者

#### 特長と意義

国連のエッカフエの東シナ海海底石油資源報告で、尖閣海域が脚光を浴びる。

これが契機となった実施された総理府委嘱の鉱物資源予備調査である。

調査日程、内容、メンバーは、高良博士の助言を受けて、琉球政府で立案された。

沖縄壟高岡大輔専門委員を団長に、鉱物資源については、琉球大学から天然ガス分析専門家兼島博士と琉球政府工業課大城鉦山担当が参加した。

高良博士は、道案内の傍ら海鳥の調査に専念、

海洋調査を更に究めるため、前回の伊志嶺氏に正木氏が加わった。

台湾漁船が八重山や尖閣海域への領海侵犯が頻発していた、

その実態の把握のため、琉球政府新城渉外課長と地元八重山から田代氏と田盛氏、また、カービン銃を携帯し完全武装で、平良・伊良波両巡查も同行した。

台湾漁船の不法上陸、海鳥の卵、ヒナの乱獲は一段とエスカレートしていた。

南小島では、多数の台湾人労働者が座礁船の解体作業に従事、宿泊仮小屋まで建て、泊まりがけで働いているのに驚いた。

この報告を受け、これ以上の不法上陸を防ぐため、1ヶ月後に、琉球政府出入管理庁と米国民政府（USCAR）、琉球警察局の係官が巡視艇で赴き、正式に入国手続きを勧告した。台湾人作業者は、米国民政府に対して入国許可を申請した。

翌69年、石垣市役所は尖閣五島に行政標識を建立した。

70年、米国民政府は琉球政府をして3ヶ国語の不法入域警告板を設置させた。

高良博士は、尖閣の海鳥を文保委が早めに保護鳥指定すべしと、更に訴えた。

なお、この五次調査を契機に、以後の尖閣調査は高良博士が主導した総合学術調査と高岡らの鉱物資源（石油・天然ガス）調査に分岐し、大きく進展していく。

この意味でも、第五次調査は節目にあたる調査であったと言える。

#### 主な調査報告書

- 12 「尖閣列島周辺海域の学術調査に参加して」高岡大輔  
季刊「沖縄」特集尖閣列島 第56号 1971.3
- 13 「尖閣列島の海鳥について」高良鉄夫 琉球大学農学部学術報告  
第16号 1969.10
- 14 「尖閣列島の水質」兼島清 工業用水 第128号 1969.7
- 15 「海洋学的に見た尖閣列島」伊志嶺安進、正木譲 復命書 1969.6

## 2 . 調査関連新聞記事等

- 1 . 第一次～第五次調査に関連する主な新聞記事等（見出し）を集録しています。
- 1 . 文中の旧漢字は一部新漢字に改めました。
- 1 . 本書に内容を収録してあるものは、「\*」の表記を付しています。

(1) 第一次調査関連記事

1950.03.16 (?) 新聞不祥 (高良鉄夫氏スクラップ記事より)

昆虫の生態追求に 高良氏尖角列島へ

生物の生態は人為的に漸次変化されている傾向にあり、真のせい態を観察するためには大陸の奥地かさもなければ無人島に乗り出すことが完全な資料蒐集の鍵だとかかねて計画を進めていた高良農校長は今春休を利用単身尖角列島へ出発、昆虫せい態及び分布を調べたいと準備している。氏のたゆざる学究的態度は常に尊敬の的であり、この調査の結果で学界への波紋が大いに期待される。氏は昨日同無人島へ出発予定のところ準備の都合で、数日後になる模様。

生物の生態は人為的に漸次変化されている傾向にあり真のせい態を観察するためには大陸の奥地かさもなければ無人島に乗り出すことが完全な資料蒐集の鍵だとかかねて計画を進めていた高良農校長は今春休を利用単身尖角列島へ出発、昆虫せい態及び分布を調べたいと準備している。氏のたゆざる学究的態度は常に尊敬の的であり、この調査の結果で学界への波紋が大いに期待される。氏は昨日同無人島へ出発予定のところ準備の都合で、数日後になる模様。

1950.04.15 自由民報

センカク列島へ積極的な関心を 学究高良氏調査から帰る。

**センカク列島へ積極的な関心を 学究高良氏調査から帰る**

去る三月二十七日から四月十日までの間、単身で尖角列島へ出向いた高良農校長は、この島に滞在し、島の自然環境、生物の分布、生態などを調査した。高良氏は、この調査を通じて、島の自然環境が、人為的な変化を受けていることを確認した。特に、島の生物の生態は、人為的に漸次変化されている傾向にあることが明らかになった。高良氏は、この調査の結果、島の自然環境を保護し、生物の生態を研究することを目的として、今後、この島に積極的に関心をもち、調査を行うことを決意した。

尖角列島は、無人島であり、島の自然環境は、人為的な変化を受けていない。高良氏は、この島に滞在し、島の自然環境、生物の分布、生態などを調査した。高良氏は、この調査を通じて、島の自然環境が、人為的な変化を受けていることを確認した。特に、島の生物の生態は、人為的に漸次変化されている傾向にあることが明らかになった。高良氏は、この調査の結果、島の自然環境を保護し、生物の生態を研究することを目的として、今後、この島に積極的に関心をもち、調査を行うことを決意した。

1950.04.25 ~ 05.22 南琉タイムス 10回連載

無人島探訪記 高良鉄夫

- 一．尖閣列島 二．宿营地 三．北岸踏査 四．蚊群の襲撃 五．海の宝 六．小蛇の生捕り 七．西岸踏査 八．大じや生捕 九．密林踏査 十．東南岸踏査 十一．小島と海鳥 十二．無人島の嵐

1950.09.15 ~ 16 うるま新報 2回掲載

尖角列島訪問記 高良鉄夫

- (一)．海岸で鰹の釣れる島
- (二)．卵と鳥で島は一ぱい

1951.03.31 沖縄タイムス

冷凍の死体 魚釣島から運ぶ

去る十九日津堅島に帰港した神栄丸(二五トン...)は同船機関士...當間幸正さん(三六)の冷凍死体を乗せていた。調べによると同船は三月十日頃本島より二四〇マイルの俗称鳥島近海で漁労中、薪不足を来し、四船員は魚釣島に上陸薪採取に出掛けた。その中にいた當間さんは最初から山鳥とその卵をとるため一行からはぐれていたが間もなく同島南寄の崖から五丈下に変死体となつて発見されたもので崖には捕つた山鳥一羽と卵が置かれてあつたという。

(2) 第二次調査関連記事

1952.03.01 琉球新報

尖閣の秘境を探る  
琉大が学術調査隊派遣

1952.03.02 沖縄タイムス

琉大が学術調査隊が  
「せん閣列島」にメス

1952.03.27 南琉タイムス

尖閣列島への調査団  
高良助教授外六名

## 尖閣の秘境を探る

琉大が学術調査隊派遣

琉大理学部では先島の尖閣 ているが立案者の高良助教 聖し探検調査を行ったが学 列島の学術調査団を組織し 探は次の通りだった 術的に極めて興味深い無人 三月下旬から四月中旬にか 尖閣列島は生物地理学上、 島である、単独では充分成 けて東部踏査を行う計画を また海洋気象学上の重要な 果をあげ得ないので、踏査 ず、められている、これが東部 段階を早す位置にありなが 関係の各専門家の協力を得 は生物調査は勿論、資源開 ち従来生物学的調査は不充 たいと想っている にも、重要資料をもたらすも 分であった、一昨年三月 たいと想っている

の大きな期待がかけられ、 独で同近海出漁の高船に如



1952.03.28 沖縄タイムス  
尖閣列島 科学調査団 きょう出発

## 尖閣列島



琉球の最南端に点在する九つの島。この無人の尖閣列島に科学のメスをふるうべく農林省と琉大から七名(うち三名琉大生)がきょう勇躍出発するが彼地における研究対象とその抱負を訊くことにしよう

### 科学調査団 きょう出発

本誌研究所知念正男氏「水産研究所知念正男氏」水産研究所知念正男氏「水産研究所知念正男氏」水産研究所知念正男氏「水産研究所知念正男氏」

或は母船式のものでも毎年訪れている現状である、然し現在まで余り荒れてないから良い漁場となつてゐるのか或は相当獲つても続く

漁場であるかは、調査不十分のためはつきりしていないう、なお石灰岩の産出状況やその分解状況を学問的に研究したい、

多和田真じゆん氏談「同列島には植物界で珍重されている高等ヒスイランと火山島があるといわれ、私は大いに期待している、火山島はついでに一種で沖縄ではワドンガマーといわれ大輪の花がさく、同島はそうろ、クバが密生、果してどんな植物が発見出来るか、楽しみにしています

高良鉄夫氏の語「私は海鳥類、ハチユウ類、昆虫の分布生態を研究する積りですが、同列島は生物地理学上海洋気象学上重要な位置を示しており資源開発面に大きい波紋を期待している、昨年実地踏破したときには無毒のヘビが相当いたしハ

性質を知つて捕獲の制限等が必要があると思ふ、なほ石灰岩の産出状況やその分解状況を学問的に研究したい、

多和田真じゆん氏談「同列島には植物界で珍重されている高等ヒスイランと火山島があるといわれ、私は大いに期待している、火山島はついでに一種で沖縄ではワドンガマーといわれ大輪の花がさく、同島はそうろ、クバが密生、果してどんな植物が発見出来るか、楽しみにしています

高良鉄夫氏の語「私は海鳥類、ハチユウ類、昆虫の分布生態を研究する積りですが、同列島は生物地理学上海洋気象学上重要な位置を示しており資源開発面に大きい波紋を期待している、昨年実地踏破したときには無毒のヘビが相当いたしハ

1952.03.29 沖縄タイムス  
尖閣列島 学術調査団 きょう出発





# 鳥類群せいする無人島に 科学のメス揮う

## 調査団きのう出發

琉大農学部高島助教の率いる調査団一行は十九日午後四時出港の首望丸で出発したが、次に尖閣列島の北々西約一八〇軒の地点にあつて一〇と五分五馬力の漁船で石垣島から一七一時間かかる。

△位置一東経一二三度二八分一四度四分、北緯二五度四分一五度五分

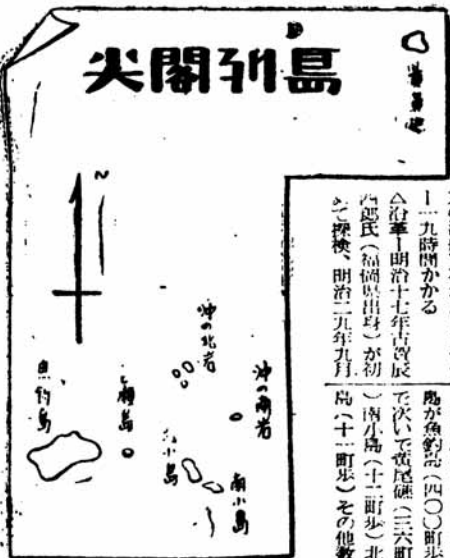
△調査一明治十七年古賀辰四郎氏(福岡県出身)が初探検、明治二九年九月

△調査第一号を以て日本領に定められ、以後古賀氏が同島を経営、海鳥糞、羽毛糞、藻類等を採んでたが大正末期から再び無人島になつていた

△列島の構成一最も大きい島が魚釣島(四〇町歩)で次いで黄尾礁(三六町歩)

△南小島(一七町歩)北小島(十一町歩)その他個々の詳細は調査団の報告を待つ

### 尖閣列島



の暗礁がある

△學術的価値一尖閣列島の占める位置は台湾海峡を北上する黒潮の北東転向点にあたり、一方地かく変動の激しいところで生物地理学上、海洋気象学上極めて興味深い群島である、無人島で波が荒いので交通の不便であるため過去において学者の往来もすくない

△過去における學術調査一明治三三年医学博士高島幹之助、沖繩師範校長の河野氏が古賀氏の特別贈与を渡航、昭和十五年古賀研究所の正木伍氏が日本農林省より派遣された探検隊員に随行して、各々の結果を發表しているが何れも短期間の調査のため十分でない

一行の主任予定は魚釣島(六日間)北小島(一日)南小島(一日間)となつているが、魚釣島はカジキ、カツオ、海鼠などと同島五〇米の沖合で面白いように獲れる。

北小島南小島とも琉球の海鳥類の繁殖地として有名であり、足の踏み違ふない位群をなしている。一行の研究対象は、水産研究所知事土井氏「水産動物の分布状況、繁殖関係、浮遊生物、漁業基地としての調査調査研究。

高島氏(福岡県出身)が初探検、明治二九年九月

△調査第一号を以て日本領に定められ、以後古賀氏が同島を経営、海鳥糞、羽毛糞、藻類等を採んでたが大正末期から再び無人島になつていた

△列島の構成一最も大きい島が魚釣島(四〇町歩)で次いで黄尾礁(三六町歩)

△南小島(一七町歩)北小島(十一町歩)その他個々の詳細は調査団の報告を待つ

一行の主任予定は魚釣島(六日間)北小島(一日)南小島(一日間)となつているが、魚釣島はカジキ、カツオ、海鼠などと同島五〇米の沖合で面白いように獲れる。

(写真)は向つて右から知念正雄、多和田真じゆん、松本昭男、新垣秀雄、上野大賢、棚原清一、高島鉄夫(の諸氏)

1952.04.02 海南時報  
あす現地へ出発 尖閣の秘境探る学術調査団

1952.04.03 南琉タイムス  
尖閣調査団来島

1952.04.04 自由民報  
尖閣列島調査団 明日現地へ出発

<p><b>尖閣列島調査団</b></p> <p>明日現地へ出発</p> <p>尖閣列島の科学調査団七名は二日若葉で来島明五基本九で尖閣列島へ乗り込み同島で十日程滞在の調査課と四つに組んで研究を</p> <p>高良鉄夫(琉大助教授)と琉大参三名陸棲動物の分布生態</p> <p>多和出技官(資源局)有用植物の分布生態</p> <p>記念技官(水産試験所)海産資源の分布生態</p>		<p>デーゼン三百ドラムが入荷し業者をホツトさせ、いっしょにお同船は二度も西表炭白トを積んでいく</p>
		<p>短評</p> <p>社大どう分裂予懸線へ突入だが離島には離島の共通運命 関心は複雑</p>
<p>尖閣列島へ調査団</p> <p>日本漁船は既に基地化</p> <p>調査から施策へスピード要す</p>	<p>×</p>	<p>×</p>

短評 尖閣列島へ調査団 日本漁船は既に基地化  
調査から施策へスピード要す

1952.04.21 海南時報  
珍種新種続々現わる 尖閣秘境の成果

1952.04.21 海南時報  
植物採集

1952.04.22 自由民報  
尖閣列島調査団帰る 新種発見土産に

1952.04.23 南琉タイムス  
調査団帰る 高良氏一行

1952.04.25 沖縄タイムス  
きのう賑やかに開所式 琉球水産研究所  
移転八度目に落ち着く

# 尖閣列島學術調査団帰る

## 新種や珍種発見

### “冬季漁場には最適”

開閉は前ほどよりも早く、九つの小さい島がなる。これは開閉の間に開閉の調査団は、大島、中島、南小島と魚釣島を、  
 一行は三月廿九日若狭丸で帰途に向い、約二日の旅を終え、島根  
 けした。調査団は、二十一日早朝九時、島根県松江市に到着した。

予言自叙より「開閉をめぐり、調査について、高良氏は、その成果を、今度の調査結果として、  
 天候に恵まれて、北小島、南小島、魚釣島、に上出来た。調査団は、  
 予言自叙より「開閉をめぐり、調査について、高良氏は、その成果を、今度の調査結果として、  
 天候に恵まれて、北小島、南小島、魚釣島、に上出来た。調査団は、

予言自叙より「開閉をめぐり、調査について、高良氏は、その成果を、今度の調査結果として、  
 天候に恵まれて、北小島、南小島、魚釣島、に上出来た。調査団は、  
 予言自叙より「開閉をめぐり、調査について、高良氏は、その成果を、今度の調査結果として、  
 天候に恵まれて、北小島、南小島、魚釣島、に上出来た。調査団は、



(写真は尖閣列島の風景)

予言自叙より「開閉をめぐり、調査について、高良氏は、その成果を、今度の調査結果として、  
 天候に恵まれて、北小島、南小島、魚釣島、に上出来た。調査団は、  
 予言自叙より「開閉をめぐり、調査について、高良氏は、その成果を、今度の調査結果として、  
 天候に恵まれて、北小島、南小島、魚釣島、に上出来た。調査団は、

冬季の季節は世界的に、  
 尖閣列島は世界的に、  
 冬季の季節は世界的に、  
 尖閣列島は世界的に、

### 死ぬとは迷信

試験して見事、育つ

高良氏が宮古へハブ

高良氏は、宮古へハブを連れて行く。ハブは、  
 高良氏は、宮古へハブを連れて行く。ハブは、  
 高良氏は、宮古へハブを連れて行く。ハブは、

### 波にたいよう

### 四つの遺骨

一行が懇ろに葬る

一行が懇ろに葬る。一行は、  
 一行が懇ろに葬る。一行は、  
 一行が懇ろに葬る。一行は、

- 一、魚釣島 二、シウ蛇の巻 三、南小島の洞くつ 四、魚釣島の廃虚 五、魚釣島の宿舎 六、カツオトリ 七、シロガジマル 八、北小島 九、テツボウユリ 十、棒で魚を獲る 十一、岩また岩



1952.06.02 ~ 04 琉球新報 (3回連載)

尖閣列島調査報告 1 ~ 3 松元昭男

南小島 カツオ島 シュダ 魚釣島 小屋とピロウ ツツジとラン

1952.06.08 沖縄タイムス

貝の新種発見タカラノミギセル

### 貝の新種発見

#### タカラノミギセル

琉大 教授高良鉄夫氏は、先に尖閣列島魚釣島で採集した隆起貝の新種をこのほど新報の権版 都大動物学教室 田徳米博士の手許におくり鑑定を求めたところ次のように命名、学界に発表する旨岡氏へ連絡があった。それによると

△学名 サブテイクス (ヘテロサブテイクス) タカライクロダ

△和名 タカラノミギセル (新称)

この貝はキセルガイ科に属し長さ一センチ二ミリ、かつ色、中めがねでみるとら層は九層になつており、口は二つあるように見え、外

概は従来全く知られなかつた珍しい形をしている。これはピロウの朽葉の中から得られたもので僅か三個を採集したのみで採集は二日間を要したとのことである。

台湾、琉球列島、九州南端に数多く棲息する貝類にはアツマイマイ、ノミガイイボアヤカワニナ、がありこれまで尖閣列島からマサキベツコウマイマイ 昭和十五年正木任氏、タタマイマイ 多田氏の二種が発見されて三つの新種が発見されたわけ、貝類は細密に調査されていないので更に新種発見の可能性があると高良助教は語っている。

1952.06.29 ~ 07.15 琉球新報 (17回連載)

尖閣列島採集記 多和田真淳

1 ~ 17

(3) 第三次調査関連記事等

1953.07.24 八重山タイムス

高良助教 近く来島

1953.07.31 南西新報

研究と指導

琉大農学部生来島

昨日尖角別島へ

### 研究と指導

#### 琉大農学部生来島

#### 昨日尖角別島へ

琉大農学部 高良鉄助の日程は次の通り  
夫 宮城元助助教授昨日川平方面現地指導をはじめ動物学指導の後、尖角列島へ  
二名は昨日早朝海洋学 石垣に二日間  
丸で来島 約二〇日尚その他現地指導の  
豫定で八重山郡島外 一 移民地の開  
(尖角列島を含む) 發状況

●生物やその利用面 ●放牧場の實態  
●調査研究と現地指導 ●熱帯作物の栽培  
●殊に尖角列島に於ける夏鳥 ●棲息潮  
●風害と昆虫消長研究 ●一 標本採集等となす  
同研究指導

## 調査余滴

### 尖閣列島写真の戦後第一号、 波間に浮かぶ南小島

1950年渡島した時に初めて撮った写真である。

波間に浮かび出た島影を見たときは、躯が震えるほど感激した。

ああ、あれが古賀の無人島だ！！。

夢にまで見たトリシマ（南北小島の古名）・尖閣列島だ！！、とねえ。

小さな盛海丸（10トン：20馬力）は大時化の中で、うんと揺れたものだから、船酔いはひどかった。

ふらつく足で甲板から初めて撮ったのがこの写真である。



当時カメラは持ってなく、友人から借りて持参した。

俄かカメラマンとなって、あれこれ撮ったが、下手くそだからうまく撮れない。

帰ってから現像してみたら、殆どの写真が写っていないのはがっかりだ（笑い）。

そんなわけだから、第一次調査の写真はほとんどない。

運がいいことに、この写真だけはうまく撮れている。

最初にシャッターを押して写したものだから、僕にとって、思い出深いものがある。

だから、これまで、尖閣列島を紹介するのによく使ってきた写真だ。

（高良博士談）

### 3 . 調 査 報 告 書

~ 各 次 每 個 別 篇 ~

## 第一次調査報告書

- 1 . 無人島探訪記      高良 鐵夫  
南琉タイムス（10回連載） 1950年4月25日～5月22日
- 2 . 尖角列島訪問記      高良 鉄夫  
うるま新報（2回連載） 1950年9月15日～16日

# 無人島探訪記

高良鐵夫

1

## 南琉タイムス

発行所 第一野城一社  
社長 勝連 勇  
副社長 銀行人 芳  
宮 良 長

送料30 送  
発行 月十四

### 無人島探訪記

高良鐵夫

一 尖閣列島 だと思つたに感概無  
一日も早く尖閣列島を 占める 三月二十七  
波つて見たいといふの 日午後七時海軍九(一  
が二年前からの私の切 オトン二〇馬力)は新  
實なる希望であつた 大船の船が次第に前  
それは同列島が生物地 船の揺れが次第に前  
目指して北西に進 大船の船が次第に前  
路をとつた 街の電燈 頭に覆くたつて来た  
は水々と姿をかくし 威嚇せられてならない  
上上の要所に位置して 苦しい波路に寝は明け  
はすつとも姿をかくし 威嚇せられてならない  
るからである それ程 だまつた 懐しい街  
を打つては戻して見 美わしい人々の心が胸  
無人島への航行がいよ を打つては戻して見

が波は高く扇島半島尖閣列島をして無人島  
小島島西表島がほかと思つて全く夢の  
のかに見える あれやうであつた 船は上つた  
これやと街の文化生活下つたりひびく播

午前十一時二十 針余面積三百六十七  
分魚釣島の西北岸に 同歩余石垣市宇登野城  
船しここで上陸準備 中へ漸く小舟に乗る移  
をす 二、宿營地  
海岸に廣きよらしい 舟着場には煙の頭や内  
のが見える 船員が 識が惜氣もなく捨てて  
オイオと呼ぶ 船員が 那海の一人魚釣島  
の中からおイオと答 へた 船員が 那海の一人魚釣島  
て三人の男が向う 船員が 那海の一人魚釣島  
快である 船員が 那海の一人魚釣島  
北緯二十五度四十六分 船員が 那海の一人魚釣島  
いで来た 船員が 那海の一人魚釣島  
年古賀氏の煙工場の 船員が 那海の一人魚釣島  
跡である事がかつた 船員が 那海の一人魚釣島  
そして現在二月前上 船員が 那海の一人魚釣島  
り發田氏の煙加工場 船員が 那海の一人魚釣島  
になつてゐる 三人の 船員が 那海の一人魚釣島  
男が煙草から舟をこ 船員が 那海の一人魚釣島  
中へ漸く小舟に乗る 船員が 那海の一人魚釣島

午前十一時二十 針余面積三百六十七  
分魚釣島の西北岸に 同歩余石垣市宇登野城  
船しここで上陸準備 中へ漸く小舟に乗る移  
をす 二、宿營地  
海岸に廣きよらしい 舟着場には煙の頭や内  
のが見える 船員が 識が惜氣もなく捨てて  
オイオと呼ぶ 船員が 那海の一人魚釣島  
の中からおイオと答 へた 船員が 那海の一人魚釣島  
て三人の男が向う 船員が 那海の一人魚釣島  
快である 船員が 那海の一人魚釣島  
北緯二十五度四十六分 船員が 那海の一人魚釣島  
いで来た 船員が 那海の一人魚釣島  
年古賀氏の煙工場の 船員が 那海の一人魚釣島  
跡である事がかつた 船員が 那海の一人魚釣島  
そして現在二月前上 船員が 那海の一人魚釣島  
り發田氏の煙加工場 船員が 那海の一人魚釣島  
になつてゐる 三人の 船員が 那海の一人魚釣島  
男が煙草から舟をこ 船員が 那海の一人魚釣島  
中へ漸く小舟に乗る 船員が 那海の一人魚釣島

南琉タイムス(10回連載)  
1950年4月25日~5月22日  
主な所蔵先 沖縄県立図書館  
同上八重山分館  
石垣市立図書館



1950年の尖閣列島への単身調査の快挙は、驚きと共に痛快事であった。

うるま新報の「尖閣列島訪問記」の記事（[■](#)に掲載）に出会ったときは心ときめいた。編者もその感動を筆者に語ったら、地元八重山紙へ他の調査状況をレポートしたと知らされた。古びた新聞切抜を見せられ、感激は更に倍加した。

56年前の赤茶けた紙片に「無人島探訪記」の題字が躍り出ている。

地元紙に10回ほど連載されていたが人目につかずのままだった。

誰もが明日の糧食を探し求めた飢餓の時代に、無人の島尖閣に魅せられ、よくぞ調査レポートを残してくれた。真摯な姿勢と先見性に感心させられた。

著者によれば、新聞に掲載されたものは、一部について抜けや省略があり不完全であると言う。当時の新聞社の不自由な状況（活版印刷のため活字不足が悩み）を考えれば、止む得ないとのことだったかもしれない。

# 無人島探訪記

高良 鐵夫

## 一．尖閣列島

一日も早く尖閣列島へ渡つて見たいというのが二年前からの私の切実なる希望であつた。それは同列島が生物地理学上、又海洋気象学上の要点に位置しているからである。それ程までに念願していた無人島への航行がいよいよ今日実現されるのだと思うと実に感慨無量である。三月二十七日午後七時盛海丸（一〇トン二〇馬力）は新川沖を出発し、魚釣島を目指して北北西に進路をとつた。街の電灯は次々と姿をかくし富崎を廻るとともに電灯はすつかり姿をかくしてしまつた。懐かしい街、美わしい人々の心が胸を打つ。月は冴えているが波は高く屋良部半島、小浜島、西表島がほのかに見える。あれやこれやと街の文化生活を考えると行く先の無人島生活が思いやられる。

船の揺れが次第に大きくなつてちつとして居られない。次第に頭が重くなつて来て船に弱い者の哀れさを痛感させられてならない。

苦しい波路に夜は明けて午前七時水平線手前に魚釣島、南小島がかすんで見える。あれが尖閣列島そして無人島かと思うと全く夢のようである。船は上つたり下つたりでひどく揺れ、船側に砕ける大波は甲板を洗い流す。

午前十時半南小島北小島の西岸側を通過し、魚釣島の南岸に沿うて西北岸に廻航する。南小島北小島に於ける海洋鳥の群が双眼鏡に映ずる。魚釣島南岸の断崖絶壁は見ただけでもぞつとする。全島見渡す限りピロウが一杯繁茂している。

午前十一時二十分魚釣島の西北岸に停船し、ここで上陸準備をする。

海岸に廃きよらしいものが見える。船員がオーイと呼ぶと廃きよの中からオーイと答えて三人の男が向う鉢巻で出てきた。船員にきいて見るとここが数十年前古賀氏の鰹工場の跡である事がわかつた。そして現在は一月前より発田氏の鰹仮加工場になっている。三人の男が海岸から舟をこぎ出して来る。午前十一時五十分荒波との流の中に漸く小舟に乗り移る。汀線は珊瑚礁が舞台状に縁着している。

午前十一時五十分東支那海の一無人島魚釣島に第一歩を踏む。真に痛快である。

北緯二十五度四十六分三十秒東経百二十三度二十九分の一地点に立つて漁労に行く盛海丸を見送る。

魚釣しまは石垣しまを去ること六十軒の位置にあり、尖閣列とう中の最大島で周囲十一軒余面積三百六十七町歩余石垣市字登野城に属している。

## 二．宿营地

舟着場には鰹の頭や内蔵が惜気もなく捨てられ腐敗臭がそよ吹く風にぶん〜とし

て鼻をつく。船酔いと臭気で目暈がしそうになる。ふら～しながら廃きよの楼門をくぐつて中に入った。積み重ねられた石垣は第三紀砂岩であり厚さ約三米高さ約四米実に堅固である。

風波を防ぐための石垣であるが故三方には出入の出来る程度の楼門がある。この囲の中に二坪の幕舎と約三坪のヒロウ茸の仮工場が設けて居り無人とう生活の空気がみなぎっている。そこで私も五人の加工場の仲間入りをしこの幕舎に泊めてもらう事にした。こゝには清浄な小流水があり実に佳良な飲料水が得られる。近隣にはテツポウユリの花が咲きほこりキセキレイ、ホホジロセキレイ？がせつせと飛び交し、タカサゴシヤリンバイの花の香が鼻をつく実に住みよいところである。

ヒチロウネズミ？が人目をぬすんでちよこ～こう動している。地面が動いているので早速掘り出して見たらジャコウネズミであつた。アラシトカゲ、オキナワトカゲ？が石垣の穴から出たり入ったりしている。三毛猫（野生化）が鰹を盗みに藪影からのぞいている。カモ、カモメの一種が時々訪れて来る。

このような周囲の状況からみるとここが無人島中の大都会でありこれ等の自然が吾々の心を慰めてくれる。

### 三、北岸踏査

二十八日午後一時早速調査採集に着手、これからが単独こう動である。北部海岸に沿って東北に進む。砂浜が殆んどないので海岸砂地植物は到つて貧弱であり、クサトベラ、モンパノキ、ハマオモト、グンバイヒルガオ、ハマナタマメ類が僅かに点在している。これらの植物はすべてが無人島育ちの趣を添えて人待ち顔に見える。宿営地の東北方約三百米の地点にはムサシアブミの小群落があり、付近の岩影には人間の白骨が重なっている。疎開途中に遭難した人々らしい。

無人島で哀れな最期をとげられた人々の為にしばらく黙とうを捧ぐ。

沿岸岩地にはガジマル、アカテツ、イヌマキ、リュウキユウガキ等が荒れ狂う風波のために、多くは一米位の高さで曲折し灌木状に育っている。

しかもこれが斜面に沿って圍っている様は実に面白い。

午後二時半沿岸砂地ハマゴウの中に蛇を発見したが取り損ねてしまった。

逃げ場は朽木の根元である。周囲の状況から判断してみるとこの穴が棲息所らしい。上陸早々蛇にぶつかるとは余程この島には蛇が多いものと思われた。

目前に赤褐色の裸をみせた大岩小岩が重なりころがって居り地殻の大きな変動の跡がみえる。その中央にたつて高い所からみ渡すと約二十町歩位ある。断層を見ると閃緑岩？を基岩としてその上に第三紀砂岩がのつて居り所々に泥板岩を噴き出している。又石炭層が五六糎の厚みではみ出ている。

### 四、蚊群の襲撃

夕食をしていると、首をちつくりと刺すものがある。捕らえて見ると蚊である。最

速空襲がはじまつたと誰かがいう。黄尾島の爆撃かと思つたがそうではなく、これはネットアイエカの襲撃である。音もなく飛んできて静かに止まり、手足等裸出て居ればところかまわず刺す。これが実に巧妙でいたくてたまらない。

無人島の蚊は食物にかつていと見える追払つてもやつてくる。

今正に人間と蚊が二坪の幕舎の中で生存競争が展開されている。

さてこれが幾日続くだろうかと思うと気になる。

無人島で蚊に殺されたのではたまらない。

アフリカ未開地に於けるねむり病媒介者ツエツエ蠅のことが頭にういてくる。

打ち落されても次々と増強してくる。無人島のネットアイエカは実に執念深い。生温い防除では間に合わない。最後の手を打つことにして硫黄燻煙をはじめ。漸く退散せしめたが床に就くと再び襲撃がはじまつてくる。一群のものは既に蚊帳の中に入っている。無人島の夜は磯に砕ける波の音と蚊の襲撃に更けて安眠が出来ない。そこで夜半に波打際に出たがそれでも又追いついてくる。

天空をながめ海をながめ輝く星と大波の音にうたれ寂寞を感じつゝ睡眠不足のまゝに夜を明かした。この島にいる限り蚊の襲撃はのがれることが出来ない。

## 五．海の宝

三月廿九日早朝から海の方が特別騒がしい。びつくりして幕舎を出て見ると、二隻の漁船がカジキの群を追いまくつている。海岸から二百米程しか離れていない。相変わらず波は荒い。船は上つたり、下つたり、ひどく揺れている。突き台の上に立っている四人の漁師の槍は今まさにカジキを突き刺そうとしているが船がひどく揺れるので見当がつかないらしい。

カジキは必死になつて逃げようとしている。

時々そんな大きな中体が空に跳り出る。その光景は正に手に汗握る痛快事といえ、まさにあつと言う間に槍は投げられ、カジキにぐさりと突き刺さる。

早速うきが流され、船は全速力で次のカジキを追いつけて行く。

他方約四百米のところでは人間と海洋鳥と魚の生存競争が演ぜられている。

雑魚を追う海洋鳥と鰹の群やカジキを追う漁船群、無数の海洋鳥と魚群と八隻の漁船との間に食うか食われるかの一大決戦場が展開されて居り、この魚釣島でなくては見られない一大絵巻といえよう。船の中に投げ込まれる銀白色の鰹、えつさ〜と引き上げられるカジキ、海亀等凱歌は漁船にあがる。

漁船群を追つて移動分散集合常なく沖を走る。このような光景は沿岸又は沖合で毎日展開されて居り、これ等漁船の中には大島、沖縄から近きは与那国、宮古からも来ている。尖閣列島はまつたく海の宝といえよう。

マス、カツオ、ハカツオ、トビウオ、イルカ、フカ、クジラ、海亀等に恵まれて居り、斯る海の幸は海流の関係が主体であろうが、又魚釣島そのものの地形と森林植物が魚附の効を多分に持つているものと思われる。

## 六、小蛇の生捕

午後二時昨日取り逃した蛇を生捕りに行く。予想通り棲息所の穴から出て、日当ぼつこをしていて人間が接近しつゝあるの知らないらしい。

生捕るには丁度都合が良い。今度こそ取り逃がしてはならない。

きづかれなように匍うて行き、岩影に身をかくし、そこで双眼鏡、胴乱等を肩から下して身軽になる。蛇の逃げ場と頭をめぐらして岩影からさつと飛び込み、左足で穴をふさぎ両手を以て頭と尾を押さえ難なく生捕る。

一人苦笑しながら凱歌をあげて宿営地に帰る。

長さ八十三糎、シユウダ科のナトワリツタスに属する一種である。

夕暗迫る宿営地上空にはリユウキユウツバメの一群が旋回遊飛しているのが目撃される。

(以下は宿舎を出て、西海岸を北に向う記述であるが、原稿の前半部が抜けている)

.....植物はすべて根こそぎにされて腐朽しており、新にススキ類、ナンバンキセル、ボタンニンジン、イリオモテアザミ?、クサスギカヅラ等が点的的に生えている。

後で漁師より聞いて解つたが、この一帯は先年(一九四七年?)の地震によつて山がくずれたものらしい。

大岩から小岩へ、小岩から大岩へと時々巾飛して渡らねばならない。

時たま飛び損ねて岩と岩との間に落ち込んだり、或は向う脛を打つたりして実に歩き難いところである。岩盤の間から清い水が流れており、やはり飲料水として佳良である。北方水平線上に小島が浮いて見える。これは北緯二十五度五十五分、東経百二三度四十分、永久危険地区として指定された黄尾島である。

双眼鏡で見ると海岸は概して断崖絶壁をなして居り、中央部は山丘になつている。この黄尾島こそ農業上関係の深いところであり、海洋鳥も又多いところであるが惜しいかな危険地区に指定されて調査が出来ない。

数十年前は島の海洋鳥及び鳥糞が資源として重宝がられ当時移出産物になつていたという。日は既に西海に傾いて居り、夕陽あびながら宿営地に帰る。

## 七、西岸踏査

沿岸植物を求めて今度は西海岸を南進する。これ又砂地が殆んどなく北岸と同様に第三紀砂岩が汀線に傾斜露出して居りあるいは所々に珊瑚礁が舞台状に縁着している。従つて砂地植物は殆んどなく岩上にイヌマキ、マサキ、ガジマル等が生えて居りその生態分布の状況は沿岸と大した差はない。鳥類ではリユウキユウアカシヨウビン、シロサギが目につく、第三紀砂岩の断崖絶壁に遭遇して路頭に迷う。

仕方がないので草を踏み分けて、断崖上を宇廻したが再び断崖に遭遇してしまつた。

進退極まつて進むことが出来ない。進路を変えて後退し汀線の断崖を下ることにした。装具が邪魔になるので先づ双眼鏡、水筒胴丸等を縄で下にし裸足で一歩一歩下る。眼下には砂岩の大がころがつて居り崖に岩コケが生えている。時々すべて頭の毛がさつとする。漸く地獄崖を通り汀線上を南岸に廻つたがここで再び火山岩の絶壁に遭遇した。眼下は青海原であり完全に進路を阻止された。

東方には北小島、南小島が手に取るように見える。魚釣島南岸の断崖上には岩骨の突出した山があり近くの断崖はテツポウユリ、キキヨウラン、サクラランが見える。海岸にはヒノキ、カタン、ラワン、米松、スギ等の流木が打ち上げられているが、何れもフナムシが深く侵入して居て用材としての価値なく薪以外には利用出来ない。

しばらく休息の後再び地獄崖を通つて帰路につく

## 八、大じや生捕

明けて三十一日島の縦横断を計画し島の最高点を指して早朝出発した。

勿論道はない。自ら路を切りひらいて進まねばならぬ不利をまぬがれない。沿岸の灌木層から喬木層に入る山中には大小幾多の岩が重つて居りしかもコケが生えているので容易に進めない。昼尚暗い密林がある。

タブノキ、イヌマキ等の木材資源が目につく。体の小さな黒鳩がピロウの葉をばた〜たたいて飛び去る。アツマイマイが時々目につく。羅針盤を取り出して進む、二時間経過の後漸く南岸の絶壁上に出た。

青臭い蛇の臭気が鼻をつく。後を振り向いてびつくり二三步飛び下る。今通つて来たばかりのリウキユウガキの根元に二匹の蛇が鎌首をあげてこつちをにらみつけている。運が良かったと胸をなで下しながら後へ廻りあなをのぞいて見た。胴周り約三十糎と二十五糎もある二匹の大蛇のヤエヤマニシキヘビ?である。

一人で生捕りすることは心細いので応援を求めに宿営地に向かつて大急ぎで山を下つた。三十分の後宿営地についたのであるが幸にして漁師も数名一時の休養のために上陸している最中応援を乞うたら心よく承諾してくれた。漁師三名製造人一人それに小生計五名、身軽になつて喜び勇んで出発した。既に一時間半を経過しているが余り急ぎ過ぎたため方向を違えてしまいとんでもない竹やぶに来て居る。漁師の三名は時間の都合でここから引き返すことになつた。

製造人の大底某と二人でさんざん探し求めた結果漸く先刻の進路に出ることが出来た。約十分の後蛇の居所についたが一匹は既に逃げていない。附近探し求めたが見つめることが出来ない。居残つた一匹は余程警戒をしてこつちを向いている。大底某をして大蛇の前方で演技をさせ蛇の後方から首をしめる方法をとつた。

## 九、密林踏査

午後二時進路を変換し再び羅針盤を最高峰に向ける。伐採しながら進路を向ける。どこを見ても主体を占める植物はピロウであり、高さ十五米、葉柄の長さ五米以上に



達するものが沢山ある。葉柄の付け元にコメツキムシが居りこの虫を食うために長さが十四五糎もある大きなムカデがいる。うっかり葉柄をもぎとるとこのムカデにやられることがある。腐朽したビロウの幹中にはタイワンカブトムシの幼虫が見受けられる。海岸近くから中腹にかけてのビロウは一米位の高さで心芽をもぎとられ枯死しているものが多い。これは野菜代用として採取されたものらしい。奥地へ進むにつれタカサゴシャリンバイ、クスノキ、イヌマキ、タブノキ、リュウキユウガキ、ガジマル、クサギ、ヤマグワ、クロツグ、アコウ、モチノキ、ツバキ、アカギ、オオバギ、フトモモ等の樹木は勿論、ハカマカズラ、ハマナタマメ、クワズイモ、ムサシアブミ、トウズルモドキ、フウトウカズラ等の生育が良く原生林相をそなえたところもある。

殊にクロツグは葉柄の長さ七米に達するものがある。山林中の崖又は谷間にはサクララン、マツバラ、オオタニワタリ、リュウキユウセキコク？、リュウビンタイ、ノキシノブ、オニヤブソテツ、オオアマクサシダ、ヘゴの一種、ミズスギ等が目につく。時々たまべニチヨウ、アサギマダラが谷間を飛んで行く。

野禽として山林中で最も多く見られるものはメジロ、ヒヨドリであり、物珍らし顔で人を見つめるのは面白で。やはり無人島育ちの趣きを添えている。

山頂近くに来ると蛇の臭気が鼻をつく。ビロウ、ガジマルが密生しているので昼なお暗い。ガジマルの気根がまるい

#### 十、東南岸踏査

四月二日午前八時再び北部海岸線を通り東北岸に進路を求めた。海岸線はやはり珊瑚礁が第三紀砂岩に縁着して舞台状になつたところがあり、又岩が汀線にころがり、あるいは諸所に間隙があつたりして歩行は極めて困難である。砂浜が少なく砂地植物は西岸同様貧弱である。岩上にシロサギの骸骨と羽毛が散つて居り鳥と鳥との生存競争の後が無人島の一角に残されている。おそらくツナの仕業であろう。黄尾島、沖の北岩を左に見つゝ前進する。岩と岩との間に僅かな堆土を利用してアダンが元気なさそうに生えて居り何等の大蛇がつり下つているように見える。蛇の臭気を求めてガジマルの根、岩影、あるいは樹上を探しても見当たらない。ガスをたいて飛び出したものは小蛇一匹、捕て見ると上陸翌日捕つた小蛇と同一種、略同大のものであつた。

午後四時半山頂につく。高所から見渡すと北方沖合に黄尾島が見え、眼下には沖の南岩、沖の北岩、北小島、南小島、魚釣島を中心として移動している十数隻の漁船等、尖閣列島のすべてが手に取るように見える。

沿岸の植物相は資源的価値も認められない。その他東北岸の植物相も大した変化がない。この東北部海岸は明治の末期頃までアホウドリが二、三ヶ所に群棲していたということであるが、今日ではアホウドリの棲息は見られない。

これは種々の妨害のために北小島あるいは南小島に移動したものであろう。

沖の南岩トビ瀬島を目前に見て東岸を南下、北小島、南小島の岩山が尤立して如何

にも物騒に見える。南岸の中部付近まで来ると崖が多く、容易に汀線を渡ることが出来ない。無理をして漸く進んで来たが遂に進退極つてしまった。今更海岸線をもどつて帰るのも無意味な感があったので思い切つて断崖絶壁を攀じ登ることにした。先づ胴乱、双眼鏡、水筒、靴などが邪魔になるので一応装具は縄で結んで置き断崖を登り終つてから縄で引き上げることにした。まるでヤモリが壁を匍うようにして崩れた砂岩の突角を足場にして登ること十数分、崖の半分まで来たとき右足下の岩が崩れ落ち全身の重みを左足と右足にかけた瞬間、今度は右手の岩が欠けあつと言う間に断崖下に落ち込むところであつたが幸いトウズルモドキが四五本垂れ下がっていたのでとつさの間にこれをつかみ漸く命を救うことが出来た。これこそ命の綱であつたのである。仕方なく断崖を下り進路をかえて再び崖を攀じ登る。

崖上出た時は既に午後一時半、時間の都合上で南岸のがい上迂回を中止し横断して北岸に出た。若し断がいを迂回し島を一周するなら一日を要するであろう。

#### 十一、小島と海鳥

魚釣島の東南方約四軒隔つたところに二つの小さな島がある。これを北小島、南小島と言ひ漁師は俗に鳥島といつて居る。北小島、南小島は約三百五十米離れている。両島ともに第三紀砂岩に珊瑚礁が所々に緑着して居り、峻嶮な岩山の無人島であつて海鳥の棲息に適している。北小島は周囲三軒余、面積約二千五百アール海拔約百三十米、南小島は周囲約二・五軒、面積約三千二百アール、海拔約百五十米、近海は波も荒く流れも速いので天候のよい時でも船をつけることは困難である。樹木はないが雑草らしいものが双眼鏡で見える。

南小島には洞穴があり、四米位の大じやと海鳥調査のため両小島に渡るべく計画を進めたのであるが天候に恵れず遂に両小島を目前に見ながら上陸することが出来なかつた。

以下両小島に行つた経験のある漁師連と双眼鏡で見た実況とを総合してみよう。

南小島にいる海鳥はクロアジサシ、セグロアジサシ、アホウドリ、クロアシアホウドリ、リュウキユウカツドリ、シロイツチヨン、オオミヅナギドリ、クロウミツバメ等でありこれらの海鳥は魚類を食うのでその糞は肥料として貴重なものである。

両島から飛び立つ海鳥群は空を覆い実に勇壮であり、ステツキを振れば一振りですぐ三羽たたき落されるという。

上陸すると最初の程は人を珍らしそうに見つめているそうであるが一度彼鳥を驚かすと人間を見ただけでも飛び去るといふ。

アホウドリやその卵等が乱獲されているがこのようなことでは折角の鳥群も四散し跡を絶つに到るであろう。繁殖が極めて遅緩なものであるから妄りに捕獲することを禁じ一種の保護法策を講じて群棲を誘致し、無限の肥料資源を得るようにしなくてはならない。

数十年前には魚釣島にもすう十萬羽のアホウドリが棲息していたようであるが現在



は跡が絶えており、黄尾島にも島を覆う程棲息しているようであるが永久危険地区に指定されているのでその状況は不明である。

## 十二．無人島の嵐

四月五日あやしいと思われた天候は予想通りに夕刻から風雨が強くなり、寒気が急に襲つて来た。

海岸の方にはあわただしいエンジンの音、騒動しい漁師の大声が聞こえる。夜半には遂に大嵐となり宿営地も又混乱状態に陥る。ピロウ葺の小屋はぐらつき、雨は打ち込み、三坪の幕舎はひつたぐられそうになつて来る。幕舎に載せた石がおちる。荒れ狂う大波は雷鳴とともに惨しく響く、頼りになるものはこの石垣ばかりである。これが崩れてしまえば宿営地は風波のために一掃されるかも知れない。とんでもない無人島へ来たものだと思つて不安でならない。一枚の毛布に身をくるみ、ばた～揺れる幕舎の中で夜の明けるのをまつ。

明けて六日早朝楼門から海岸をのぞくと昨夕水を補給して居た五隻の漁船はもう姿が見えない。前夜半の中にどこかへ逃避したものらしい。山のような大波は磯に砕けてものすごいしぶきを上げる。陸地に引き上げてあつた刳舟は完全に転覆されて腹を見せて居り、海岸に放置されていた鰹の頭や内蔵がすつかり洗い流されて清掃されている。昨夜まで元気よく飛び交わしていたリユウキユウツバメの一群はすつかり元気を失い簡単に手で捕らえられる。

追記、本稿は「幽霊船」など記述に抜け等があり不完全である。

再掲にあたり、文中誤りを訂正・補足し、旧漢字は一部新漢字に改めた。

( 終り )

2

尖角列島訪問記

高良鉄夫

うるま新報

1950年9月15日

金曜日



せんかくれつとう  
尖閣列島  
無人島と言えはかた

のひなは先住み入りのめつしりし、(か  
をなした夫あう無てどかつぶからつ、(か  
はま鉄はうとい書たこんあびばてゆい  
ハのさ高どとれをしに属じれなが下  
にタ下省のんむ話ま島いたれなみ  
さかして林にどりのおき列しと思せよ  
アを農生らどりの島を琉すのぎであり

かいがん、かつお  
海岸で鰹の釣れる島  
農林省(前八重山高等農林学校) 高良鉄夫

うるま新報  
社址 沖縄県三原町五丁目  
印刷所 池田城秀蔵  
発行所 うるま新報社

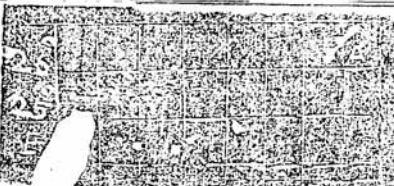
ひるなお暗し  
また鼠の中はピロ  
ウ クバ、イヌマキ、  
ガジマル、アコウなど  
がしげって、ひるも力

魚釣島は約三三  
〇メートルの岩山がつ  
立っており、海から  
見ると まつたく満載  
でもすんでいるように  
見えるので、うなぎみ  
わ、島はまわりが  
十一キロメートル、か  
んせき四平方キロメー  
トル、風のしずかな時  
でも波があらいで、ト  
陸するのがなかなかむ  
つかしいです

魚釣島  
魚釣島は約三三〇メートルの岩山がつ立っており、海から見ると まつたく満載でもすんでいるように見えるので、うなぎみわ、島はまわりが十一キロメートル、かんせき四平方キロメートル、風のしずかな時でも波があらいで、ト陸するのがなかなかむつかしいです

十九時前のうちにこの  
列島の近くにはたどりつ  
くことができませんが、  
ちようど台湾の北方お  
よそ一八五キロメー  
ルにあたっています  
この列島は魚釣島  
うかつりとう、黄尾島  
ころびとう、北小島  
南小島等四個、島から  
成り立っています  
うかつりじま

おくらいところがあり  
山羊のなきごえ、ハ  
とび、ハトおとびだ  
したり、三メートル以  
くもある穴をたへびが  
ちよいちよい見られる  
のでひとり歩むはは  
りよい風持ちはしませ  
ん、水は岩のあいだか  
らわき出すのでのみ水  
の心ばいはいあります



A 沖繩、I みや古、  
八重山、J 尖閣列島

うるま新報 (2回連載)  
1950年9月15日~16日  
主な所蔵先 沖縄県立図書館  
沖縄県公文書館  
琉球大学図書館

終戦直後の新聞は混沌とした世相を伝える記事が満載していた。

そんな中に、「尖閣列島訪問記」の紹介記事を見つけたときは驚いた。戦後の島のように、子供向けの平易な文章で伝えているのに感動したことは前述した。

古賀の無人島「尖閣列島」の情報は、戦中・戦後久しく途絶えていた。

筆者が那覇へ転出を機に、全県紙「うるま新報」へ寄稿した2番目のレポート、島の様子をかいつまんで伝えており、掲載効果も大きかった。

ちなみに、尖閣列島といえば「漁業資源の宝庫」と「海鳥の楽園（又は王国）」がすぐに連想される。（昨今では「石油資源」と「領有問題」に変わったが）戦後一時期は、この2つが尖閣を象徴し、イメージさせるものだった。

このキーワードを作り、島をイメージを定着させたのは高良博士である。

「海岸で鰹の釣れる島」と「卵と鳥で島は一ぱい」の記事がはそれを如実に示している。また「...冬の漁場としてのねうちが高いように思われた...鳥のくそを利用することを考えなければならない」として、第二次合同資源調査を予告している。子供向けの記事であるが、報告書の1つとして収録した。

## 尖角列島訪問記

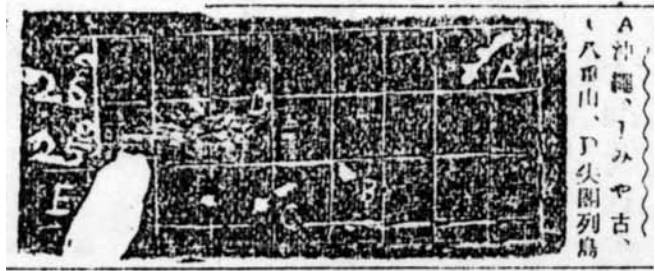
農林省（前八重山高農校長）高 良 鐵 夫

### （一）海岸で鯉の釣れる島

さきにハブをのむアカマタのおはなしをして下さいました農林省の高良鉄夫先生にこんどは“あほうどり”といううみどりのむれとぶ無人島のお話を書いていたゞきました。この琉球列島にこんなめずらしい島があつたのかとたゞたゞふしぎに思われるばかりです。地図とてらしあわせながらゆつくりおよみ下さい（かゝり）

#### 尖閣列島

無人島と言えばみなさんは、すぐ絶海の孤島を思い出し何かしらきみ悪く思うでしょう。私はさる四月こん虫さい集のため尖閣列島という無人島に行つてきました。尖閣列島とはどこにあるでしょうか。またどんな島でしょうか。



八重山の石垣島から北北西に進路をとつて行くと一〇馬力、二十五トンの漁船でおよそ十九時間のゝちにこの列島の近くにたどりつくことができますが、ちょうど台湾の北方およそ一八五キロメートルにあたっています。

この列島は魚釣島：うおつりとう、黄尾島：こうびとう、北小島、南小島等は個々島から成り立っています。

#### 魚釣島

魚釣島はがけが多く、南がわの岸には約三六〇メートルの岩山がつゝ立っており、海から見ると、まったく海賊でもすんでいるように見えるので、うすぎみわるい。島のまわりが十一キロメートル、めんせき四平方キロメートル、風のしずかな時でも波があらいので上陸するのがなかなかむつかしいのです。

海岸から二〇〇メートルぐらいのところではカジキ、カツオ、フカ、ウミガメ、イルカなどがとれるほど魚が多く。

#### ひるなお暗し

また島の中にはピロウ、クバ、イヌマキ、アコウなどがしげつて、ひるもなおくら

いところがあり、山羊のなきごえのするくろいハトがとびだしたり、三メートル近くもある大きなヘビがちよいちよ見られるのでひとり歩きはやはりよい気持ちはしません。水は岩のあいだからわき出すのでのみ水の心ばいはありません。

## (二) 卵と鳥で島は一ぱい

せんそう前はウミドリが足の入ればもないほどにふえ、おどろかせてやると一せいにとび立つて空をおゝい、くその雨がふるありさま、またステツキを一ふりするとかならず二、三羽はおちたという尖閣列島のトリ島 ...

### 南小島 北小島

南小島は海ばつ一五〇メートル、まわり二・五キロ、北小島は海ばつ一三〇メートル、まわり三キロあるが、どちらも海中からぬつとつき出た岩の島で木はない、小説にある“おにが島”や“がんくつ王”のすんでいるような島にている、この島はふつうトリ島といっているが、アジサシ、アホウドリ、カツオドリなどのウミドリがじつに多く、タマゴと魚と鳥が一ぱいになっている。(註：誤字訂正)



### 息もとまる ほどだ

火をたいていと夜どおしくないのでねつかれない、また風しみに船をとめると、くそのにおいで息もとまってしまうようになるほどだと言われているが、終戦後りようしによつてめちやくちやにとりつくされたので、その数がへりつゝある。

この列島のまわりでは、ウミドリと魚の食うかくわれるかのものすごい生存競争が手にとるように見られる。

### 黄尾島

黄尾島は米軍政府から永久きけん地区にさだめられていて上陸することはできなかった。

この尖閣列島は動物や植物の分布のようすを知り、またその生活のもようを研究するのにたいせつな場所となつている、また魚のとれぐあいやその種類から見て冬の漁場としてのねうちが高いように思われる、一方ウミドリをみだりにとらないようにし、たくさんふえるように保護してやることと、鳥のくそを利用することを考えなければならぬ。